

消えゆく墓地

20年で2,210カ所減



人口減や高齢化で、消滅する墓地が増えている。鹿児島県内では20年前に約1万1,700カ所あった墓地のうち、2,200カ所以上が消えた。残る墓地でも墓石が横倒しになり、雑草が生い茂り、維持管理が難しくなっている。人の流出が止まらない地方の厳しさを物語る。

過疎高齢化、維持難しく

眼下に東シナ海を望む小高い丘。急勾配の坂を歩くと、下から小さく見えていた墓地が目の前に現れた。南さつま市坊津町久志の塩屋集落の共同墓地。道の舗装はひび割れ、所々で地面がむき出しになっている。

あちこちに横倒しにした墓石が目立つ。朽ち果てたわけではなく、真新しい墓石を丁寧に寝かせてある。台風などによる倒壊を防ぐためだろう。

横倒しにした墓石が目立つ墓地。眺望の良さが集落民の自慢だ

＝18日、南さつま市坊津町久志

100基以上ある墓のうち20基近くが同じ状態で、いずれも遺骨は入っていない。それ以外も数基を除いて、遺骨は入っていないという。



久志は穏やかなリアス式の湾に沿って小さな集落が点在する。高齢化率は県平均の倍以上の55.5%。塩屋集落には墓の数と同じ約100世帯が住んでいたが、現在は39世帯に減った。小中学生はおらず、久志の中でも特に高齢化が進む。

集落を離れ、居住地近くに設けた墓や納骨堂に改葬する人も増えた。15年前には久志にも新しい納骨堂ができ、ほとんどの遺骨が移された。

当時、塩屋集落の公民館長だった木場勲さん(85)は住民の要望を受

け、納骨堂建設を寺に掛け合った。「墓はあっても世話する人は住んでおらず、日常的な墓参りはできない。ほとんどが高齢者で半分は一人暮らし。坂道もきつい」と話す。

厚生労働省の2012年度「衛生行政報告例」によると、複数の墓を集めたいいわゆる「墓地」は県内に9,463カ所。20年前より2,210カ所も減った。

地方の集落ばかりではない。県都・鹿児島市の市営墓地でも放置される墓が増えている。市は1998年度から、市営墓地で一定の期間管理されていないとみられる区画の調査を始めた。名義人に連絡がとれず、「花がない」「草が伸び放題」などの基準に該当する墓は撤去される。

これまでに撤去したのは14墓地で804基。引き続き市内で最も古い興国寺(冷水町)と草牟田の2カ所の、約1500基が対象になっている。

撤去となれば、市が遺骨を掘り起こして無縁納骨堂に移す。市の担当者は「県外に出た人が県外で墓や納骨堂を手に入れ、故郷に残した先祖の墓を放直しているケースが多いのではないか」という。

塩屋集落の墓地は「県内一素晴らしい眺めが自慢だった」(木場さん)という。遺骨がなく

なっても、盆や正月には墓を掃除する住民がいる。遺骨を納骨堂に移さずに、墓参りを続ける女性（70）に話を聞いた。

「自分が元気なうちは、このお墓を守ろうという思いだった。小さい頃から墓に花を供え続けてきたから。景色もよく、ほっとする。ここで仏様に語りかけてきた」。昨年6月には94歳の母を亡くし、この墓に埋葬した。

子どもは集落を出て暮らし、自分以外にこの墓を見てくれる親類もいない。「私ができなくなれば、墓は本当になくなっちゃうかもしれない」。女性が寂しそうに視線を落とした。

（北村茂之）

平成26年6月29日（日）／南日本新聞